

前号を読んで

コミュニティ力を育てる

蓮見 孝

人間総合科学研究科教授

フォーラムは、いつもその厚さに圧倒され、“あした読もう”ということになり、いつの間にか書類のヤマに埋もれてしまう。A4サイズのヤマに積まれたA5の小冊子は、やがて“雪崩”を引き起こし、マンモスの化石のように姿を現す。

フォーラム(75号)を久しぶりに通読した。副編集委員長の松田紀之さん(以降「さん」付け)から「前号を読んで」の執筆を頼まれたからである。モチベーションを高めるために、まずは中村紀一さんの「三酔人教養問答序説」から読み始めた。「教養はゴミだ」という意見に対して「ゴミ一つひとつを大切に作る心がけが必要」という洒落な表現に、クックツと含み笑いが出た。先日の研究科教員会議後の「FD研修会」で、工藤副学長から大学院教育に関して「研究能力+人間力の醸成が必要」との解説がなされたが、人間力の醸成のためには、紹介されていたシカゴ大学のような味わい深い教育を醸成するためのしかけが求められるだろう。

次に、新たに筑波大学に転入された方の頁を開いた。小笠原正明さんの指摘を

読みながら改めて認識させられたのは、大学という「共同体」の存在である。若い学生たちにとっての大学は、単に通過するだけの教育プログラムではなく、生まれて初めて体験する大人のコミュニティであり、それへの参画が学生の人間力を育てると考える。ゴミだらけ、犯罪類発のキャンパスでは、とてもではないが明日のコミュニティのイメージを学生たちに示すことはできない。大学の全てのスタッフが、豊かな教育資源を生かしながらよりよいコミュニティの醸成を意志して連携しなければならない。転入教員に対して、本学はどのような大学なのかという事についての説明や研修はなかったという藤原義博さんの指摘にも考えさせられた。立山雅博さんの具体的提案にもあるが、大学が自らを熱く語りかける学生や教員を対象としたオリエンテーションは、大学の自己分析・自己表現の場として大切にすべきである。

最後にひとこと私論を述べたい。私も何度かフォーラムに寄稿したことがあるのだが、「前号を読んで」での評価や議論の生成を心待ちにしていた。しかし結局は“なしのつぶて”に終わり寂しい思いをした。年間3回の発行では、論議も生じ難いし、単なる弁論大会で終わりがねない。「知識基盤社会」の構築に向けて、大学の交流・発信メディアを見直し、双方向的に高め合えるプラットフォームの実現をめざす必要があるのではないかと考えている。

(はすみ たかし/プロダクトデザイン)